

生存科学研究ニュース

VOL. 15. NO. 1 2000. 1. 10 発行

発行 財団法人 生存科学研究所

〒104-0061 東京都中央区銀座4-5-1
電話 03-3563-3518 FAX 03-3567-3608

年頭のご挨拶

—新しい知的創造社会へ向けて—

理事長 江見 廣一

年頭に当たって一言ご挨拶申し上げます。

平成12年は、西暦2000年に当たることから、過去1世紀を回顧して、20世紀が人類の歴史にとってどういう足跡を残したかの評価を行うと共に、来るべき21世紀の社会について、それをどういうヴィジョンで描き、その方向への第1歩をどう踏み出すべきか、が種々論評されています。

それによると、20世紀は科学技術の目ざましい発展があった反面、二つの世界大戦を含む戦争の時代でもあった、という反省があります。したがって21世紀は、技術の成果を世界の平和と人類の福祉に役立てるものでなければなりません。21世紀への期待を示すキーワードとして、ある人は「平和」・「環境」・「行政改革」をあげ、他の人は「バイオ」・「環境」・「IT（情報技術）革命」をあげています。そのいずれにも「環境」が重視されているのは、産業革命以来の負の累

積としてもたらされた地球温暖化への危惧があるから、それにストップをかけるよう、これまでの成長拡大型の社会経済システムを、循環代謝型のものに変えていかねばなりません。筆者はそのヒントの一つとして環境との共生を重視した日本文化の伝統的知恵を再評価すべきことを主張しました（参照：拙稿「日本文化と生存科学との対話」・『生存科学』Vol. 4, No2）。

上記のIT革命は、いわゆる「ヒトゲノム計画」と結びついて遺伝子レベルでの治療に画期的変化をもたらすでしょう。しかし、同時にそれは生命倫理上の価値判断と強く結びついていることを忘れてはなりません。

2000年の4月からは公的介護保険がスタートし、昨年来の医療保険と公的年金の2つの改革も年度内に決着を迫られるでしょう。

生存科学研究所は、上述の諸内容を含めて人類生存基盤の新たな構築に向けて、そのグランド・デザインを提示する役割の一端を担わなければなりません。会員の諸賢と力をあわせて、この課題に真剣に取り組みたいと思います。

江橋節郎氏に国際生物学賞

長年にわたり生存科学研究所の評議員としてご尽力いただいております江橋節郎氏（東京大学名誉教授・岡崎国立共同研究機構生理学研究所名誉教授）に国際生物学賞委員会（藤田良雄委員長）より第15回国際生物学賞が授与されました。

江橋氏は、筋小胞体が能動的にカルシウムイオンを取り込んで筋肉を弛緩させ、また微量のカルシウムイオンがトロポニンを介して収縮させることを実証して、動物生理学の進歩に大きく貢献すると共に、細胞内情報伝達機構におけるカルシウムイオンの役割について先駆的な寄与をされたことが受賞につながりました。（「生理研トピック」より抜粋）
心よりお祝い申し上げます。

平成11年度武見賞受賞者選考委員会 「公益信託武見記念生存科学研究基金」 運営委員会報告

平成11年11月16日（火曜日）午後4時より三井信託銀行本店において開催された標記委員会において、平成11年度の武見記念賞及び武見賞奨励賞の受賞者の選考が行われ、唄孝一氏が武見記念賞の受賞者と決定いたしました。

唄氏は、「医療における法と倫理」の在り方の研究において、その問題を探究するために医事法学という法学の領域を開拓し、日本医事法学会の中心として、その研究成果の深化と普及に努めるとともに、他方では、北里大学医学原論部門長として医学部・病院における実践的課題に貢献されたことが評価され

て受賞となりました。

贈呈式は、平成12年1月24日（月曜日）三井本館にて行われる予定。

第3回 生存科学研究講座報告

平成11年度の生存科学講座の最終回が、11月13日（土）に教文館ビル9階会議室で「死・そして未来」をテーマに開催されました。講演者には、宇宙飛行士向井千秋さんの夫で病理医である向井万起男氏（慶応義塾大学医学部助教授）と産婦人科医で脳とホルモンの専門家である大島清氏にお願いしました。

大塚正徳副理事長による開会の挨拶とお二人の講演者の紹介があり、その後、筆者の司会により講演会を始めました。

向井万起男氏は、始皇帝が不老不死にあこがれたという話から始め、人間を含めた生物には寿命があり、より大きな自然界、地球にもその寿命があり、永遠の生命への願望の無意味さについて指摘されました。また、ご自身の病理医としての経験から、遺体の解剖のように死に近い仕事をしていても、病気の原因の究明のための仕事なので、意外なことに死については考えないとのことでした。

次に、大島清氏からは、人類の脳の進化を中心にお話がありました。人間の3欲、性欲・食欲・集団欲について話され、現在はデジタルの性、肉体なき性の傾向があることを指摘されました。そして、人類の脳の発達について、スライドを用いて400万年の経過を説明され、脳の3層構造、脳幹、大脳辺縁系、大脳新皮質について説明をいただきました

た。最後に、頭脳のソフトウェアの話がされ、人間の性的逸脱行為についてもふれられました。

このあと、休憩を入れ、およそ50分ほど会場からの質問などに対して、向井氏と大島氏がお答えになり、非常に活発な討論が行われました。

講演会の終わりに、江見康一理事長の挨拶があり、最後に、本講座の企画委員長の小島静二理事から、今年度の生存科学講座の全体についてのまとめと、閉会の言葉があり、盛会のうちに終了しました。(高木廣文)

第5回銀座ナイトセミナー

「生きる」シリーズ報告

第5回銀座ナイトセミナー「生きる」シリーズが、1999年12月17日(金)18時より、生存科学研究所会議室にて開かれた。「統計学者の生きる」と題して、生存科学研究所専務理事で、東京大学名誉教授の鈴木雪夫氏による報告が行われた。

生命保険の分野などでよく使われる「生命表」という統計がある。何歳時点の平均余命は何年あるかを示すものだが、鈴木氏は、5年毎に発行される「市区町村別生命表」(厚生統計協会)の作成に携わってこられた。過疎の村はもちろん、人口の小さい町村について意味のある精度の生命表を作るためには、古い統計学は不十分であり、鈴木氏の専門であるベイズ統計学の手法を用いなければならないという。

鈴木氏は東大数学科在学中に、ワルド(A. Wald)の「Statistical Decision Functions」(1950)という著作を読み、統計学に進ん

だ。文部省統計数理研究所で統計学の理論を研究した後、68年、東大経済学部に移り、統計学の講座を担当、理学部数学科の統計学も担当した。ワルドに親しんでいた鈴木氏にとって、ベイズ統計学に傾斜していくのは自然なことであったようだ。事前分布と観測データからベイズ定理により事後分布を導き、この事後分布に基づいて推論を行うというベイズ統計学の考え方は、現実の人間の意思決定を考える場合にも通じる。その応用の一つとしては、分散投資のためのポートフォリオ理論などがある。いまや、ベイズ統計学は、医学の分野はもちろんのこと、自然科学・社会科学・人文科学の諸科学での統計的研究のために欠くべからざるものとなっているという。

ベイズ統計学について、また、意思決定のあり方について、参加者の間で活発な質疑が行われた。

現在の鈴木氏は、多摩大学大学院で統計学及び数学、確率論を教えている。この大学院は非常にユニークで、学生は社会人のみで、年齢は26歳から63歳と実に幅広く、その多くは中央官庁の中堅クラスやさまざまな業種の企業に勤めるサラリーマンだが、中小企業の経営者、大学の教授、助教授、講師もいるという。授業は主として、土曜日のため、このところウィークデイは授業の準備、土曜日は授業という生活だそうだ。

後進の育成に努める氏の姿は、本セミナーのテーマである「生きる」とも、一脈通じるところがあるように思えた。

(津谷喜一郎/北澤京子)

第1回・第2回

21世紀世界の文明と生存研究会報告

表記研究会が第1回は平成11年11月13日(土)、第2回は平成11年12月11日(土)いずれも18時より、生存科学研究所会議室にて開かれた。

第1回は自己紹介をかねて、それぞれが互いに異なる背景と仕事、研究について述べ、メンバーの相互の理解を深めると共に、今後の研究会のテーマをどのような点に焦点を絞っていくか等について話し合った。

第2回は「保健医療のマネジメント」について小林廉毅氏(東京大学大学院医学系研究科保健経済学)に、また「リハビリテーションの今まで、これから」について赤居正美氏に話題提供をお願いした。

小林氏は「保健医療のマネジメント」が目的、合理性、能率(これは効率とスピードからなる)という要素からなることを解説し、さらに公共財としての医師養成について話された。医師数の将来予測が紹介されたが、専門科や地域への分布などを考慮すると、単に総数だけでは議論できないこと、とくにわが国ではプライマリ医と専門医との役割分担が不明確で、今後、資源配分上の非効率が生じてくることが指摘された。

次に、赤居正美氏は、リハビリテーションの本義が復帰にあり、中国では「復権医学」と呼ばれているということから話を始められ、治療不能な段階としての「機能障害(Impairment)」、代償や補償が可能な「能力低下(Disability)」、そしてより社会的な意味合いの「社会的不利(Handicap)」という3段階

で理解することが適切であることを指摘された。リハビリテーションは手術、薬物以外のすべてを動員して患者のQOLを高めることを目的としていること、また、「なおる」とはどのレベルで考えられるのか、という視点から、疾患モデルから障害モデルへの転換が今後の医療の進むべき方向として考えられるべきであるとの指摘があった。

この二つの話題提供から、参加者による質疑ならびに意見交換が活発に行われた。とくに医療と福祉の関連、また医学教育の方向性あるいは理念の変革の可能性が医学史の側からも論じられた。

会員寄贈図書

バイオエシックス
教育のために

大林雅之著

1999年9月10日発行

発行所

株式会社 アイ出版

定価

本体2,200円+税

研究所日誌

- 11月13日(土) 第3回生存科学講座
第1回21世紀世界の文明と生存研究会
- 11月18日(木) 第4回常務理事会
- 12月11日(土) 第2回21世紀世界の文明と生存研究会
生存科学講座委員会
- 12月17日(金) 第5回銀座ナイトセミナー